

Ecola

イ・コ・ラ

No.13

発行 2010年11月13日

こんにちは！ またまたイコラの季節（春と秋ですが・・・）がやってきました。皆さん、お変わりございませんでしたか？ 今年は、いきなり夏が終わり、突然冬になり、何かと戸惑った方も多かったのでは？ タンスの衣替えもできないまま「何を着ればいいんだろう？」などと困ったり・・・。そうそう、風邪などひいたりしていませんか？

この夏、わが和歌山県自閉症協会にとって、すごく大きなイベントがありましたね。900名を超える参加者が全国から和歌山に集まり、各分野最前線の先生方とともに白熱の2日間を過ごされました。今回のイコラは、全国大会をふり返っての大特集です。

第21回全国大会inわかやま

7月17日(土)、18日(日)の2日間にわたって、和歌山県民文化会館、アバローム紀の国で「社団法人日本自閉症協会第21回全国大会inわかやま」が開催されました。「いとしご」124号に、その詳しい内容が掲載されていますので、今回、イコラでは、このような大きな大会を和歌山で開催するにあたり、2年以上にわたって奮闘された大会実行委員の方々（全員ではありません）の“裏話的感想”をご紹介します。

実行委員それぞれの目から見た全国大会



大会事務局長奮闘記



事務局長 石橋智恵子

北海道から沖縄まで、全国から約900名の方が大会に参加されました。来賓・招待者70名、講師30名をお迎えし、盛會に終えることができました。スタッフ・ボランティア147名、その他、旅行代理店、司会者、手話通訳、交流会イベント出演者等々、本当に沢山の方々にご支援ご協力をいただきました。感謝以外の言葉が

みつかりません。

実は、自閉症協会和歌山県支部の頃に全国大会開催を決めた時から、「大丈夫かなあ」という不安はずっとありました。もう10年も前になりますが、初めて全国大会に参加したのが香川県高松市で開催された四国大会。それから静岡、岐阜、熊本と参加してきましたが、それぞれ特色のある大会でした。和歌山ならではの大会って？何か凝った内容にしなければならないのか？という思いもありましたが、準備を進めていくうちに、いつの頃からか、背伸びしないで今の和歌山で出来る大会をすれば良いんだと気持ちが変わりました。シンプルな大会になったと思います。ところが、本部役員の方から「様々な新基軸が試みられ、今後の協会の発展に寄与するものと思います。」とお褒めの言葉をいただきました。シンプルイズベストですね。



「自閉症を知らない人には正しい理解を、関係者の方には広く深い知識と情報を」を目的に開催しました。自閉症児者への理解と啓発、支援の困難さが、県民に幾分か浸透したと確信しています。

・・・・・・・・・・＜おまけ＞・・・・・・・・・・

さてさて、何か裏話やハプニングなどあればということですが、ハプニングだらけでした。私のミスで、皆さんにはご迷惑をおかけしました。準備した資料に来賓招待者名簿がありました。1000枚印刷。フォントも用紙の色も、なかなかの出来、と自画自賛（f^_^）しかし、前日の作業で、資料に差し込んでいる時にミスが発覚！！来賓の名前の一文字が違う！！○田が○井になっているではありませんか！！間違った資料を配布するわけにいかず、差し込み作業が一転抜き取る作業に。へなへなへな・・・です。他にも当日ミスが分かった件もありますが、文字数の都合で、内緒です。（～_～;)そんな時に須田さん（大会統括責任者）から「ミスはしたら良いのよ。ミスをしたらただ貴女の勉強になるでしょ。」と言ってもらえ、もう・・・・・・・・泣きそう。



全国大会には開催地（私）と協会本部に事務局がありました。2つあると、とてもややこしいことになり

ます。頻繁に顔を合わせて打ち合わせをすることも不可能です。意思の疎通が難しい環境です。意見の違いもあります。大会当日は声を荒げて喧嘩もしました。でも、それは、大会をスムーズに運営進行させていくための意見の違いなので後を引かない喧嘩です。大会を終えた今では、今後の大会のために、あの時どうすればお互いに嫌な思いをしないで済んだのかを話しています。目的が同じなら、時には感情をぶつ合う喧嘩も良いものだ学びました。（f^_^）



←スタッフと打ち合わせ中 左から石橋さん、須田さん、大久保さん

開会式



石井哲夫会長の挨拶



←来賓の方々



大久保実行委員長 ↑

茂木健一郎氏（脳科学者・理学博士） 記念講演「脳科学から見た自閉症」



←茂木氏手書きのメッセージ



須田初枝日本自閉症協会副会長と大久保さん

実行委員それぞれの国から見た全国大会

大会実行委員長

大久保尚洋

大会実行委員長のホッペ

全国大会が無事終了し、関係者の皆さまに対しては、ただただ感謝のみでございます。

2年前に記念講演を茂木健一郎氏に依頼し、ご承諾いただき、講演のテーマもすでに決まっていたのですが、NHKのディレクターを通じての連絡のみで、ご本人と直接の連絡をとることができませんでした。

大会当日、1時間前になっても連絡が取れず、「もしご本人が来られなかったら・・・」という不安が頭をかすめ、県福祉事業団の方に「そのときは、代わりに県内福祉圏域の状況を話してください」など、笑えない冗談を言っていました。



ですから、14時30分に県民文化会館の車寄せに茂木氏の姿を見たときはホッとして、「これで全国大会もうまくいった」と、胸をなでおろした次第です。



実行委員それぞれの居から見た全国大会

進行担当奮闘記

進行担当 辻幸代

私は、進行係として開会式・閉会式・記念講演の進行を企画運営させていただきました。来賓や国からの情勢報告など、当日にならなければ確定しないことばかりで、「これで万全」という準備ができず、気持ちばかりが焦った記憶があります。なんと言ってもハラハラしたのは茂木さんの到着です。地方での講演活動はほとんどされない茂木さんとの交渉は、本部役員しかできず、講演内容も当日まで誰一人わかりませんでした。開演の30分前になっても連絡すら取れず、舞台裏はとにかく祈る気持ちで待つしかできない状態でした。



到着した茂木さんに、また驚かされました。たった一人タクシーで会場に乗り付けた茂木さんは、着古した真っ赤なTシャツにヨレヨレのチノパン姿。挨拶や打ち合わせもそこそこに、リュックからこれまたしわくちやのYシャツを取り出して、舞台衣装に着替えました。舞台袖で思わず私が漏らした独り言「あ～良かったあ」に「来ないと思った？」の切り返し。講演はみなさんご存知の内容で楽しんでいただけたと思います。講演が終わるとあっという間に

赤いTシャツに着替えて嵐のように帰って行きました。

多くの自閉症支援の最前線について熱い議論が行われた大会でありましたが、これが私の一番の思い出です。



進行担当 坂東恵子

責任者、辻先生のもとで進行担当させていただきました坂東です。

準備は2年前よりはじまっていました。全国大会がどんなものか見てくるということで実行委員として熊本の全国大会へ子供とともに参加させていただきました。

ドナルドマイヤー氏の大会記念講演をはじめあまりにも立派な熊本の大会を目の当たりにして「こんなぜったいむりやで」と実行委員の若手（笑）の方々と話していました。和歌山でできることを精一杯やれば良いということで、「むりやで～」から「やらにやならん」と取り組んできました。



事務局長の石橋さんのプロデュース力、また分科会担当岡先生の確かな企画力、実行委員皆さんのチームワークで終わってみれば「熊本よりもよかったんちがうん」と自負しています。

進行の仕事は国会議員の方が直前まで何人きてくださるかわからなかったり、そしてなにより茂木先生と直接コンタクトがとれず本当に来て頂けるのか？というスリルとサスペンス、また当日は楽屋入りが14時をすぎたりとはらはらどきどきの展開でした。

こんな経験はあとにも先にもないでしょう。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

分科会担当奮闘記

第 6 分科会担当 松本眞裕美

全国大会の司会進行ということで、とにかく緊張しました。

その上、分科会が始まるまで、石井会長と当事者お 2 人との鼎談ということ以外何もわからない、まさに筋書きのないドラマという感じで…。私は見通しを持つことができなくて、ものすごく不安だったのですが、始まってみると、石井会長のみごとな采配と申しましょうか、大変よくまとまった内容になったと思います。内容の濃い、すごくいい分科会になりました。

登壇されたお三方に拍手です。



第 1 分科会（教育）	自閉症教育の最前線
第 2 分科会（労働）	就労支援の最前線
第 3 分科会（家族）	家族支援の最前線
第 4 分科会（医療）	医療の最前線
第 5 分科会（福祉）	生活支援の最前線
第 6 分科会（高機能）	当事者の自助活動の最前線



分科会担当は、岡潔さんと松本眞裕美さんでした。岡さんの分科会裏話的感想は、おなじみ「岡先生のワンポイントアドバイス」のページでござんください。



実行委員それぞれの目から見た全国大会

会計担当奮闘記

会計担当 濱中洋子

閉会式後の真夜中にやっと我が家に辿り着き、ボタン・キューで 10 時間眠り続けた高齢の会計@浜中は、翌日からも数字とのにらめっこ！ 超多忙期は抜けたけど最終決算完了まではもう少し。で、大会の思い出をほんの少～し！

5～6月、参加申込が少なく「ひえ～！大赤字？」の心配も皆様のご協力が無事切り抜け、迎えた7月16日は幸先よく梅雨明けの青空！準備した講師料・旅費・保育費用など約200万円入りのキャリーケースに、めったに掛けない「鍵」をかけ(^.^)早朝の特急でひとり和歌山へ。万札では二束やけど硬貨入り個別封入・80名分のかさばる事！道中トイレも我慢して県文までの長いこと&重いこと！閉会式直前に謝金を渡し終わるまで顔はニコニコ心はドキドキの金庫番でした(^.^)



もうひとつの担当は「来賓・招待者受付」でスタッフは県庁・支援学校・施設等の幹部の方々。前夜に流れを考え「名札と記章セット」を準備。当日は皆様が手際よく全て取り仕切って下さりお陰さまでこちらは楽勝！でした(^.^// 総合受付付近で過ごした二日間、本部の先輩方、各地の会員さん、参加の皆様との交流がとても楽しかった(^.^)し、反響の良さに安堵し、嬉しさと同時にこみ上げたのは中心を担ってくれた専門家部会の方々への感謝でした！30年あまりこの会にかかわらせてもらって、ここに来てこんな素敵な体験をさせていただき、これまで生きてきて本当に良かったと思っています(^.^) 皆様ありがとうございました。



実行委員のみなさん紹介



交流会でお嬢さんと語り合う
受付担当実行委員 那須さん→



←企画担当実行委員 花井さん
奥に見えるのは、同じく実行委員の下町さんと岡さん



会場担当として奮闘中の
実行委員伊勢家さん→



←左は、交流会でもカメラでお仕事、
記録担当実行委員の里口さん
右は、伊勢家さん

実行委員それぞれの目から見た全国大会 交流会担当奮闘記

交流会担当 山名志保

全国大会の交流会の担当をお願いします…と依頼を受け、ちょっぴり規模の大きい宴会と思えば楽勝！と調子よく快諾したのが事の発端でした。実際、準備を始めると、交流会でのイベントはどうするか？2時間の短い限られた時間で、いかに和歌山らしさ～和歌山のええところを伝えるのか？お料理はどのようなスタイルで提供するのより良いのか、メニューは？…等々、悩みどころは多々ありました。



悩んだり、行き詰まるたびに助言、アドバイスを頂いたのは、大会実行委員の皆であり、ホテルのスタッフの方であり、司会者さんであり…交流会の担当委員は、私1名のみでしたが、皆に助けて頂いたお陰で、実現できた交流会であったと感じます。

当日は、タイムスケジュール通り、何事も滞りなく～とは、いかず…。夏休み初めての3連休の初日という事もあり、イベント出演者の方が高速で渋滞

に巻き込まれ出演予定時刻に間に合わず大ピンチでしたが、他の出演者さんに先に出演をお願いし、何とか到着までつないで頂きピンチをまぬがれました。その後は、到着して休む間もないままに、全力で会場を盛り上げて下さり～今回のイベント出演の皆様には、プロ魂を間近で拝見させて頂きました。感謝！感謝！です。



桂しそ丸さん



自分の結婚式の披露宴でさえ～ここまで熱い想いを込めて計画実行は出来ませんでした。今回の全国大会の交流会は、熱く～そして、真面目に頑張ってみました。成功するよう願掛けで、禁酒したのがよかったのかしら？いえいえ、今大会に携わって下さった皆様の想いが成功へと繋がったのだと確信しています。本当に有難うございました。



国会議員の方々の挨拶



とにかく、準備は大変でしたが、やり終えて残ったのは、心地よい達成感と、格別に美味しく感じるビールの味でした。(^^)v

実行委員それぞれの目から見た全国大会

広報担当奮闘記

広報担当 山本 敬

自閉症協会の全国大会を和歌山で開催されると決まったことから、はたして同じ和歌山県内でも辺境の地、新宮市という遠い（会場となる和歌山市まで3時間もかかる）所から、何が出来るのか、また何をしたらよいのか全く分かりませんでした。会計の濱中さんとの話で新宮市に居ても出来る事といえば、「パソコンを使って出来るような事しかないのではないか」という事に落ち着きました。実行委員の役割分担で広報担当という事に決まったことは当然のことだったのでしょう。

案内ちらしの印刷については、データ作成中及び、作成後に細部まで確認を怠った事が関係の皆様方に多大な混乱と迷惑をおかけしてしまいました。また、主なデータ作成を行っていたパソコンを外付けハードディスクと間違えて、初期化してしまうという考えられないような失敗もしてしまい、データ復旧とソフトウェアの再インストール、環境設定などに多大な時間と費用を費やしました。この時ばかりは頭の中が真っ白になるというか、目の前が真っ暗になるというか、とても貴重な経験をさせて頂きました。

ポスターについては、看板原稿や新聞広告など作る事は仕事のうえでいつもしていた事でしたが、ポスターやちらしなど全く作った事がないので、創造性のない私の頭には何も浮かんできませんでした。熊本大会のポスターな



どを参考に文字や画像のレイアウトを考えま

したが、和歌山らしさをイメージすると「世界遺産・熊野古道」がどうしても頭から離れなくて、最初に出来上がった原稿はまさに観光案内のポスターと言われても仕方ないものでした。その後、脳味噌の冷却期間というか、ギリギリまで放置し、熊野古道を忘れて「新たな和歌山らしさ」としてミカンを取り入れたデザインに辿り着き、レイアウトのやり直しを多数行い最終的に採用されたものです。

大会当日については広報としてはクロークでの荷物預かりの他、カメラを持ってウロウロしていました。後日ホームページに掲載するつもりで撮れるだけ撮ったつもりでしたが、まだまだ撮れていない部分もあったかなと思っています。

全国大会 in わかやまの成功は実行委員の皆さんと、ボランティアの方々の多大なる善意と労苦によって為し得たことなんだと実感しています。ありがとうございました。



山本さん苦心の作 大会ポスター

交流会イベントにご出演いただいた弁慶伝説保存会の皆さん



実行委員それぞれの国から来た全国大会 保育担当奮闘記

保育担当 藤原清治

保育受付
奥でボランティアたちが参加者の到着を待っています。



今年の猛暑は全国大会の日から始まったように思います。私は2日目から保育のスタッフとして参加しましたが、この照りつけるような暑さが結構応えました。でも、子どもたちはポルトヨーロッパで楽しく過ごしていましたし、ボランティアの皆さんも、この暑さにもへこたれず、子どもたちをよく面倒見ていただきました。まるで、予めりハーサルしていたかのように。結局、一番へばっていたのは私自身で、保育のスタッフの皆さんに介護してもらわずに済んで良かったと正直ホッとしていました。

子どもたちが続々とやってきます。

保育担当 植野比呂美

大会保育担当は、下町秀之さんをリーダーに、木田誠也さん、藤原清治さんと植野の4人。場所設定やスケジュール作りから始まり、参加者やボランティアとの連絡などなど・・・「一つ進んだら、次やるのがどんどん広がっていく感じやね（下町さん+植野談）」というように、何もかも手探り。参加者のサポートブックを読み返しつつ、どれだけ細かくシュミレーションをしても、「何か忘れていないか」「何か突発的なことが起こらないか」など不安でいっぱい。ハラハラドキドキしながら当日を迎えました。



保育ボランティアは、総勢76人。県内の支援学校の先生方や福祉事業所の指導員方などの超ベテランも、専門課程の大学院生も、また保育初体験という大学生たちも、皆それぞれのサポートブックを熟読して保育に臨み、子どもたちを守り楽しませようと全力を注いでくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。皆さんのおかげで、後日、何人もの保護者の方々から「よかった」とのメールや葉書をいただきましたよ!(^^)!

大学2回生北山くんの保育ボランティア初体験記をご紹介します。

(「プール学院大学子ども教育学科ニュースレター」から転載させていただきました。)

私は7月17日と18日の2日間、自閉症協会による全国大会にボランティアとして参加しました。大会の日が迫るにつれ、私は「自閉症」そのものを十分理解できていないことで、参加への不安は拭いきれませんでした。しかし一方で、それ以上の大きな期待感もありました。

迎えた当日。全国大会という本物の大会に私は圧倒されました。私はこのような大舞台で、プール学院大学の代表としてそれに相応しい働きができるのか、周りを見渡しても初めて顔を合わす人ばかりです。その不安の殻を砕いてくれたのが、班リーダーの「この2日間来られる子どもさんが見たいのは、今の先生の顔じゃな



くてきっと笑顔いっぱいの顔だよ」という一言でした。その言葉に「十分に楽しませることが今回の仕事であるのに、当の本人が不安になっても何も得るものはないだろう」と勇気づけられました。

担当する子どもに不安がそれほどなかったのは、子どもの特徴がある程度記載されているいわばプロフィールなるものを事前に協会から頂いていたからでした。そのプロフィールには十分過ぎるほどの情報があるばかりか、

「シャワーを頭からかけるとパニックを起こす」、「ボーリングには行ったことがないのでボーリング場特有の大きな音がどう影響を与えるか不安である」といった保護者の子どもに対する愛情や、私達に対して「どうかこの子をよろしくお願いします」という気持ちが伝わりました。そしてついに対面。私が思っていたよりも子どもは小さく、恥ずかしがっているように見えました。保護者の方と挨拶を交わし、その子と話をしながら出発時間まで一緒にパズルをしました。彼もようやく私に慣れてきたのか、様々な事を話し出しました。自分の通っている幼稚園や住んでいる地域、そして今大会の催しの一つのマリーナシティには自分の大好きな甲虫が待っていることなど。



バスでは前方がよく見えて安心感が持てるよう、一番先頭の席に座りました。一日目は、プール遊び。自分が着替える間も目を配る必要がありました。泳ぐ時間が2時間取られていたにも関わらず、彼はたった30分でプールから上がってしまい、後は共に大好きな昆虫を捜すために周辺を散歩しました。私達が共に歩いている姿を見た他の保護者に「仲良しの親子さんですね」と言われて、思わず笑いながら大会のスタッフであることを説明しました。帰りのバスではこどもが寝てしまい、抱っこをして会場に戻る形になりました。抱き上げながら歩く一歩一歩はとても重く、大事な物を踏みしめているように感じ、寝ているまま保護者に引き渡しました。



2日目はマリーナシティに到着するやいなや、急に走り出して早速追いかけるはめになりました。ようやくつかまえ、一緒に入場券を買って昆虫館へ向かいました。昼食までの2時間と帰るまでの時間いっぱい、ずっと昆虫とふれあい観察をしました。私は立ちっぱなしとビニールハウスの暑さにへとへとでしたが、彼の楽しそうな笑顔を見ると、そんな疲れも吹き飛んでしまいました。そして、トイレのタイミング、脱水症状や熱中症の予防、集合場所に懸かる時間の計算など気をつけました。特に熱中症などは、大学の授業で危険性を学んだばかりであったので、気を配るというよりも警戒という言葉の方が当てはまるかもしれません。次の行き先であるボーリング場では、心配していた事が嘘のように何のハプニングも起こることなく十二分に楽しんでいる様子でした。



最後のお別れの場面では、彼はなかなか私から離れようとしませんでした。この2日間の出来事がより鮮明に伝わるように、途中での経過を納めていた写真をお母さんにお見せしました。彼は、昆虫館で買ってあげたおもちゃを握りしめながらぐずっていましたが、母親にだっこされて会場を後にしました。姿が見えなくなる最後の最後まで私を見つめていてくれたことには、つい寂しさを覚えました。

「教師」の職に就く目標を持っている私にとって、この2日間は貴重な経験を与えてくれました。この経験がこれからの学習の糧となることは間違いありません。このような機会を与えて下さった自閉症協会の方々、本学の先生方、そしてこの機会に出会えた仲間たちに感謝いたします。（2回生 北山晃司）

岡先生のワンポイントアドバイス⑫

全国大会を振り返って ～テーマに掲げた思い～

附属特別支援学校 岡 潔

この夏、和歌山の地で全国大会が開催されました。全国大会が私たちにもたらしたことについては多くの方が語られているとお리だと思いますし、準備や運営面では地方で開催する際のモデルとして永く伝えられていくことでしょう。

私は、実行委員として、分科会企画のチーフとして、専門家部会の代表として、2年前の準備スタートから関わりました。まず、この大会のテーマや目的を考えるのが私の最初の仕事でした。メインテーマの「自立と社会参加 自閉症支援の最前線を探る」は、私が一番関心をもっていることであり、学びたいキーワードをまとめたものでした。イコラ№9でも取り上げましたが、「自閉症者の自立って何だろう」はいつも考えさせられています。また、石井会長は「生きにくさ」とも表現されていますが、「自閉症者が地域で社会参加しながら幸せに暮らすためには何が必要なのだろう」ということも同様です。社会情勢とともに環境も変わりますから、今生きる人たちの現実をしっかりと見つめることが大切になってきますよね。

ここは和歌山県。全国旅回りをした際、最後の方に必ず取り残される県。ちょっと言いすぎかな。地方にいと余程アンテナを高く立てておかないと最新の情報に乗り遅れてしまいがちになります。一時、和歌山県の実践は、中央の10年くらい遅れているよと言われたことがありました。なにくそと、県外で行われる講演会や研修会に頻繁に出かけていた時期もありましたが、そんな無理はいつまでもできることではないですよ。全国大会が地元で開催されるなら、各分野の最前線を走っておられる方に来ていただき、ほやほやの情報を聞かせてもらいたいという欲は、私だけではないでしょう。その思いをサブ

テーマにしました。欲張りな私は、あの人もこの人もと人選をしたのですが、最終チェックは協会とのつながりという本部のフィルターがありました。これが私の予想以上に厳しいものでした。それでも、この業界の最大の団体である日本自閉症協会のすごいところは、理事にもビッグネームが連ねていることや、協会からの依頼は名誉あることとみなさんが快く引き受けていただけることにはびっくりさせられます。決して謝礼を安く済ませようなんて気持ちは微塵もありませんでしたよ。最後まで人選について



は、ぜひ話を聞かせてもらいたいという方を貫きましたからね。プログラムのとおり満足できるメンバーをそろえることができ、ほっと胸をなでおろしたのがちょうど1年前でした。分科会にかけ、期待に胸をふくらませていた私でしたが、大会当日は、分科会の総括をしていたため、全ての分科会の様子を確認しに走り回っていました。そのため、どの分野も腰を据えて聞くことができず、ええ話もちよっとずつかじっただけに終わってしまった自分がいました。トホホ。でも後日、テーブル起こしの確認のため、MDをいやというほど耳をこらして聞く羽目に・・・。

今回の大会では、自閉症の人たちにとっての自立と社会参加について、その目指す方向性について、分科会や茂木氏の記念講演会をとおして、参加者一人ひとりが考えるよい機会になったのではないのでしょうか。私は、いつの時代においても、自閉症支援の原点は、自閉症の特性を理解して、自閉症の人たちに分かりやすい環境をつくることに尽きると思います。分科会では、自閉症の人は理解者の中であれば、その力を発揮できることがたくさんあることが報告されていました。また、茂木氏は、個性に満ち

あふれた人たちを認め、少数派を大切にする社会でなくてはならないことを強く語られていましたね。最近のメディアの多くに、「障害」を「障がい」と表記し、読む人への気配りを感じますが、本来、「障害」は「障碍」の当て字で、「社会との隔たり」という意味が歴史的な語源にあります。いくら文字に

こだわって平仮名表記にしても本来の意味を理解していなければ無意味なものなのです。自閉症の人たちが生きやすい環境をつくり、隔たりのない社会にしていくために、我々の歩みはまだまだ始まったばかりなのかもしれません。



閉会式

こうして、“全国大会 in わかやま”は無事終わりました。実行委員の奮闘を中心に紹介しましたが、講師の皆さんを始め、県や市の行政関係の皆さん、スタッフやボランティアの皆さんなど、多くの方々のご協力があったからこそ成し得たことであるのは言うまでもありません。皆さん、本当にお疲れさまでした！！



写真中央は、次回開催地北海道の上田マリ子会長です←

次回開催地の紹介です→



事務局から

10月31日(日)に予定していましたバスツアーは、季節はずれの台風により中止になり残念でした。今年度中に親子で参加できる何かを開催したいと思っています。どうか、楽しみに・・・(^_-)

(事務局) 伊勢家富士雄

編集後記： 今号は、「この和歌山でもあんなすごいことができたんだね～」という感動を皆さんともう一度共有したくて、全国大会特集号となりました。ページも増量しましたが、まだまだ伝えきれないほどです。写真などたくさん載せているので、できればWeb版もごらんいただければうれしいです。(HPには、イコラに載っていない写真もたくさん出ていますよ。)

編集スタッフ：尾崎富久子・江川かがり・藤原昌子・植野比呂美

《発行》イコラ編集局(連絡先) 植野比呂美